

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	唐 井 隆 徳（大阪府）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 9 5 号
学位授与の日付	平成 3 0 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	初期經典における縁起説の展開
論 文 審 査 委 員	主 査 並 川 孝 儀（佛教大学教授） 副 査 山 極 伸 之（佛教大学教授） 副 査 平 岡 聡（京都文教大学教授）

〔 1 〕 論文の概要

本論文は、序論と結論を除き三章に分けられ、各章はそれぞれ五節に分けられ、節を全体で三二項に区分し、さらに項を三〇に細分化してまとめられている。

序論では、まず問題の所在と研究の目的・方法について述べられ、先行研究を紹介する。続いて、縁起という用語の意味を初期經典でも古いといわれる韻文經典に基づき考察し、仏教最古の縁起の用法と、縁起の論理に基づいて苦の生滅の連鎖的關係を示す縁起説の原初的形態を論じる。

第一章では、縁起説でも初期に位置づけられる三支縁起説と五支縁起説を考察するが、まずそれらの手掛かりとなる upadhi と upādāna の関係に着目し、三支縁起説「渴愛→所有（upadhi）→苦」と五支縁起説「渴愛→取（upādāna）→有→生→苦」についてその縁起説を探り、三支縁起から五支縁起へと展開していく過程を明らかにする。

第二章では、縁起説の中に取り入れられた認識作用を意味する支分（識、名色、六処、触、受）の成立を主題として論述する。まず、最古層と古層經典に説かれる縁起説とは関係が見られない認識作用に関する用語を精査し、その上で「受→渴愛」の関係と、「六処」の縁起説における意義、さらには「六処」によって生じる「触」と「受」それぞれの関係性、そして「識」について考察する。続いて、こうした三事仮和合を起点とした縁起説である八支縁起説（六処→触→受→渴愛→取→有→生→苦）と九支縁起説（識→名色→触→受→渴愛→取→有→生→苦）の成立を検討する。

第三章では、こうした成立過程を経て唱えられた十支縁起説（識→名色→六処→触→受→渴愛→取→有→生→苦）の成立を「六処」と四食説と識住説から検討を加え、その思想的背景を論じる。この十支縁起説の成立に関しては数多くのすぐれた先行研究が存在して

おり、特に「城邑經」と「大本經」に説かれる縁起説を中心に先行研究を検証しながら、流転分十支、還滅門十二支から十二支縁起説が成立したという見解に倣い、十二支縁起説の成立を考察する。十二支縁起説は十支縁起説に「行」と「無明」の二種の支分が加えられた縁起説であるが、最初は「行の滅」と「無明の滅」という還滅門の用法である「無明の滅→行の滅」として用いられていることから、まず「行の滅」と「無明の滅」それぞれの用例を韻文經典と散文經典から精査し、続いて「行の滅」によって「識の滅」が生じる過程を考察する。次に、「無明の滅」が智慧、「行の滅」が禪定を表すとし、これら二種の支分は実践的な意味をもつことから苦の滅を説く場合にのみ縁起説に付加され、初期經典から回収できない「無明の滅→行の滅→識の滅」という縁起関係が新たに構築されたと指摘する。

〔2〕 審査結果の要旨

縁起説は、ゴータマ・ブッダの悟りの内容と考えられているだけに仏教の本質にも関わる重要な思想であり、これまでも多くの研究者によって歴大な研究が存在する。しかし唐井氏は先行研究の成果と問題点を正確に把握・評価した上で、これまでとはまったく違う方法で斬新かつ意欲的に新たな視点より考察しており、その点は高く評価できる。

論文の構成を見ると、序論と結論を除き三章に分けられ、各章はそれぞれ五節に分けられ、さらに全体で三二項に、項を三〇に細分化してまとめられているが、これは論文が全体としてテーマと問題点を把握していることをよく示している。そのことを物語るように、論文全体を通して、論の構成も論理的であり、問題点を一つ一つ丁寧に論述を展開している。また、本論の補足となる部分に対しても手を抜くことなく考察し、本論文に厚みを加えている。

先行研究が主として縁起説の資料を研究の対象としていたのに対し、縁起説を構成する要素のみならず縁起説と直接関わらない諸思想に目を向け、両者の関係性に着目し、その関係から縁起説の成立と展開を考察している。また、初期經典を韻文經典と散文經典に分け、さらに韻文經典を最古層、古層に分け、そこに見られる用例を綿密に分析し、縁起説が歴史的に構築され変遷していく経緯を明らかにしており、論考の多くの部分で説得力をもつものと評価できる。

少し具体例を挙げると、*upadhi* と *upādāna* の関係に着目し、三支縁起から五支縁起へと展開していく過程を明らかにした点、また「受→渴愛」「名色→六処」「行→識」という三種の縁起関係がその縁起説が成立する以前に思想として存在せず、新たな思想的構築によって縁起説として確立されていく過程を明らかにしている。とりわけ、縁起説の中でも特異な要素である「六処」が初期經典にほとんど見られないことから、縁起説の展開過程で新たにに取り込まれ縁起説専用の用語として使用され始めた可能性に言及している点や、「識→名色→六処→触→受」という縁起関係は認識過程とは異なる別の意図をもって構築された可能性のあることにも言及し、この縁起の関係性が「六処→触→受→渴愛→取→有→生→苦」とする八支縁起説へと展開したと結論づける。こうした見解は、着眼点、研究方法ともに独創的な手法で考察され、縁起説研究に新たな成果をもたらすものと確信

する。

また、十二支縁起説になって「無明」と「行」が新たに加えられるが、その場合は苦の滅を説くために取り入れられたとされてきた。その契機となったのは「識の滅」の原因としての「行の滅」を見出したことであるとして、その上でこの「行の滅」が禅定と密接に関わっていることを指摘し、一方で「無明の滅」は智慧を表していると解釈した。そうした智慧と禅定という実践的な位置づけによってこそ、「苦の滅」を説く場合にのみ縁起説に付加された可能性があるとし、「無明の滅→行の滅→識の滅」という縁起関係が成立したと指摘し、これが十二支縁起説を成立させた契機となったと結論づける。こうした見解も縁起説研究に新たな成果をもたらすものといえよう。

本論文で扱う資料の多くはパーリ語であるが、パーリ語の翻訳に関して、文法的な正確さと現代語として意味が正しく理解できる形で提示するよう努めており、総じてパーリ語の読解力は極めて高い。縁起説を構成する支分に使用されている原語を正確に理解した上で論を展開させていることによって、論考に整合性のある展開が見られる。

こうした評価の一方で、いくつかの留意してほしい問題点についても指摘しておこう。

「初期仏教」や「初期仏教思想」など、文脈からしてその定義が必要な場合があるにもかかわらず、それがなされないまま論を進め、読み手に誤解を与える場合もあった。とくに「縁起説」以外には確認できない各支分の関係は「初期仏教思想」の範疇に属さない(p.12)旨の記述があるが、十二支縁起も初期經典中に説かれている。もしも初期仏教思想を「初期經典に説かれている思想」と定義するなら、その指摘は間違っているし、もしもその主張を正当化しようとするれば、「初期仏教思想」とは何かを定義する必要があるだろう。

資料論についてはやや問題点が見られる。初期經典を扱う場合、南北両伝の違いをどう理解するのかが問題となるが、従来より南北両伝の共通伝承は古く、そうでない伝承は新しいと考えられ、唐井氏もこれを当然の前提として論を進めているが、このような思想は真実に対する目を最初から閉じることになり、問題がある。これまでの前提には批判的に対峙し、あらゆる可能性を開いておく必要があるだろう。

『サンユッタ・ニカーヤ』12,19 に関して註記している箇所(p.86)は確かに翻訳するのが難解であるが、こうした箇所はビルマ版などの諸版を参照すべきである。近年のパーリ文献研究では、PTS 版にとどまらずビルマ第六結集版を用いるケースが増えてきており、厳密な読解のためには諸版を校合する研究が徹底されるべきであろう。また、漢訳資料を提示する場合、原文だけで十分との考え方もあろうが、説示内容を確認するためにも翻訳を施す必要があるだろう。

パーリ語の読解力は高いものの、原典の訳語にも軽微な問題が見られた。たとえば、関係詞が必ずしもうまく訳せていない箇所が散見する。関係詞を意識しすぎて訳語がぎこちなくなる場合を除き、関係詞を意識して訳す方がよいであろう。

upadhi から upādāna への変化につれて、世俗的なモノに対する所有とは別に、自己の身体や存在などを対象とすることに力点が置かれるようになったとしている(p.57)が、その理由についての考察が十分に行われていない。この点は、唐井氏自身も今後の課題としている。両者の関係に注目している点は優れた視点であり重要であるからこそ、この理由を考察することは、三支から五支へと展開する根拠を解明することにつながるはずである。

『スッタニパータ』742 偈は三支縁起説を説いていると判断できる一方で、続く 743 偈の *jātikkhaya* という複合詞からは *jāti* は苦ではなく苦の原因と理解することもでき、そうすれば、ここは四支縁起説の萌芽とも捉えることができる用例 (pp.17-8) ということになる。古層經典は仏教思想の原初的形態を示しているだけに確定しえない事例が多くあり、さまざまに可能性を探る姿勢が必要である。

縁起説には、苦の根本的原因を渴愛 (*taṇhā*) とする三支・五支縁起説、無明 (*avijjā*) とする十二支縁起説と、他方で六処 (*saḷāyatana*) とする八支縁起説、識 (*viññāṇa*) とする十支縁起説のように渴愛にも無明にも無関係な説が存在しており、その視点から見れば二系統の縁起説がある。同じ縁起説にもこうした相違がみられる理由に関しても考察が望まれる。また、苦の根本原因とされる各縁起説の支分の中で類似している *upadhi*、*upādāna*、*taṇhā*、*avijjā* の意味がどのような同異性をもって説かれているのかについても、各縁起説の意義を問うことになるので考察されるべきであろう。

縁起説の展開を考察する場合、一般に思想形成を中心に考察されるが、經典編纂という目的が先行して十支・十二支という形式がとられた可能性もあるのではないかという視点も必要であるように思われる。また、縁起説の思想的展開を他の思想と関連づけて考察しているのは高く評価できるが、他の思想を断片的に取り上げ、比較検討するだけでなく、その思想の展開過程のどの段階と関連づけられるのかという姿勢も、高い要求ではあるが、一層研究が進展するためには望まれる。

こうした指摘があるといえ、いささかも本論文の評価は減じることはない。むしろ、こうした指摘は、縁起説という研究し尽くされた感のある難解な研究テーマに挑戦し、新たな視点と方法で真正面から取り組み、縁起説全体の展開過程を明快にまとめた優れた論考をさらに進展させるための一助となるものである。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。